

# 『相棒』大全

25周年を迎えた傑作刑事ドラマ大研究

太田省一

# 相棒



## 25年の全軌跡。

プレシーズンから、劇場版、最新シーズン24まで  
刑事ドラマの金字塔を徹底解説



『相棒』大全

25周年を迎えた傑作刑事ドラマ大研究

太田省一

星海社

386



SEIKAISHA  
SHINSHO



## はじめに 『相棒』という刑事ドラマの金字塔

2000年のスタート以来24シーズンを数え、いまや刑事ドラマ史に残る金字塔となった『相棒』。では、『相棒』という作品はいつたいたどのようにして企画・構想されたのか？ そしてどのような意味で刑事ドラマの金字塔と言えるのか？ ここではそうした点についてまず確認しておきたい。

# 1 2時間ドラマから連続ドラマへ ～『相棒』の誕生

松本基弘、水谷豊と『再会』する

後に歴史的名作となるドラマが必ずしも鳴り物入りで始まるわけではなく、むしろ地味なスタートであることも珍しくない。『相棒』もどちらかと言えばそちらに属する。

2000年6月3日土曜日。それが記念すべき『相棒』初回の放送日である。「土曜日？」

と思う人もいるだろう。「水曜9時」ではないのか？ 長年のファンにとっては基礎知識の部類だろうが、最初は水曜の放送ではなかった。また1時間の連続ドラマでもない。当時まだ健在だった2時間ドラマの老舗枠であるテレビ朝日『土曜ワイド劇場』からの出発だった。

2時間ドラマは当時の水谷豊にとってホームグラウンドでもあった。トップクラスの主演本数を誇り、『浅見光彦ミステリー』、『地方記者・立花陽介』シリーズ、『探偵・左文字進』シリーズ、『事件記者・三上雄太』など、数々のヒットシリーズを世に送り出した。これらのタイトルを見てもわかる通り、職業は刑事だけではないが、どれも主人公が事件を解決するミステリーものである。

そのひとつに、『探偵事務所』シリーズがあった。警視庁捜査一課の元刑事だった男が探偵事務所を開き、依頼者にまつわる事件を解決していく。水谷豊は、主人公の探偵・室生一喜を演じた。共演は段田安則、井上晴美ら。監督は村川透。第1作の放送は1994年10月で、視聴率も19・2%（関東地区世帯視聴率。ビデオリサーチ調べ。以下、同様）と上々だった。

ただ、これは原作ものだった。鳥羽亮の小説をもとにしたドラマ化である。この場合困るのは、原作のストックがなくなつたときである。有名な市原悦子主演『家政婦は見た!』シリーズ（原作者は松本清張）のように原作にする話のストックがなくなつてもオリジナル脚本で続いていくケースもあるが、この場合はそうはいかなかった。『探偵事務所』シリーズは、1999年6月12日放送の5作目で幕を閉じることが決まる。

このシリーズに、3作目からプロデューサーとして制作スタッフに加わっていたのが、テレビ朝日（当時）の松本基弘である。松本は1963年生まれ。早稲田大学卒業後、1987年にテレビ朝日に入社。ワイドショー、バラエティ、音楽番組の現場を経て、ドラマ部門に配属された。『土曜ワイド劇場』がプロデューサーとしてのデビューである。『法医学教室の事件ファイル』や『事件』など、多くの人気シリーズを手がけるなかに『探偵事務所』シリーズもあった。

だが、いま述べたように『探偵事務所』シリーズの終了が決定してしまった。そこで松本は、水谷豊に新たなシリーズを立ち上げることを約束する。水谷もその申し入れを快諾した。そこには個人的な思いもあった。実は松本にとって、チーフプロデューサーとして水谷豊主演のドラマをつくることは長年の夢でもあった。

1968年、松本基弘は水谷豊と出会う。と言っても、そのときはテレビドラマの出演者と一視聴者の関係である。

そのドラマのタイトルは『バンパイヤ』（フジテレビ系、1968年放送開始）。ジャンルとしては特撮ドラマになる。手塚治虫の同名漫画が原作で、アニメと実写を組み合わせた実験的な手法の作品（手塚の設立したアニメスタジオ・虫プロの制作でもあった）。そこでバンパイヤに変身する宿命を負った主人公の少年・立花特平、通称トッペイを演じたのが、これが実質的デビュー作となる水谷豊だった。ドラマ撮影時はまだ14歳である。

松本は水谷豊少年の演技に衝撃を受けた。「変だ、この人。何かが違う。子どもなのに子どもじゃない——。生々しくリアルな目の動き、体のこなし」(『相棒 警視庁ふたりだけの特命係』、245頁)。このときまだ5歳だった松本基弘がここまで水谷の演技をきめ細かく観察していたことにも驚くが、いずれにせよ松本は水谷豊という俳優にすっかり魅せられたのである。

このエピソードを知ると、それから約30年経って水谷と「再会」した松本が新作ドラマの制作を早々に申し出た話にも、単なるビジネスを超えた特別な意味合いが感じられる。松本には水谷豊という俳優への深い思い入れがあった。松本にとって新シリーズの立ち上げは、人生における「伏線の回収」だったわけである。

### 輿水泰弘という脚本家

しかし水谷に約束してはみたものの、松本にこれといった腹案があったわけではなかった。新企画をどうするか日々悩みあぐねていた頃、ひとつのドラマに出会う。しかも面白いことに、それは刑事ものでもサスペンスでもなかった。明石家さんま主演のコメディである。

松本は、脚本の見事さに目を見張った。「ある日、何の気なしに点けたテレビでやっていた明石家さんまさん主演の連続ドラマ(中略)を観て、衝撃を受けた。僕が観たのは第2話だったのに、まるで第1話のように、すべての登場人物の設定がわかるのだ。これはすごい脚本家だ」(同書、246頁)。また別のインタビューでは、「キャラクター、セリフ、ストーリー、何

から何までこんなにうまく作れる人がいるんだと感動しました」(『オフィシャルガイドブック相棒』、128頁)とも松本は振り返る。エンドクレジットには、「脚本 輿水泰弘」とあった。

輿水は、1960年生まれ。情報誌出版社勤務の後フリーのコピーライターを経て、1963年『La cuisine』(フジテレビ系)で脚本家デビューを果たした。

主だったのは、コメディタッチのホームドラマ。ホームドラマは家族の会話劇が基本。さらにコメディタッチともなれば、セリフの量も増える。コピーライターを職業としていたところからも、言葉のキャッチボールで軽妙なやり取りを生み出すことも得意だったのだろう。これは、輿水が脚本を担当した『相棒』での杉下右京とほかの登場人物の掛け合いからもしばしば感じられるところだ。

『相棒』以前に執筆したなかにはお笑い芸人の出演作品が多く、ウッチャンナンチャンが主演した『ザ・ワイドショー』(日本テレビ系、1994年放送)というドラマもあった。そしてなかでも輿水脚本のドラマに度々主演したのが、明石家さんまだった。輿水脚本によるさんまの主演作は『恋も2度目なら』(1995年放送)、『恋のバカンス』(1997年放送)、『甘い生活』(1999年放送)(いずれも日本テレビ系)と3作もある。放送年からすると、松本基弘が見て衝撃を受けたのは『恋のバカンス』だったようだ。

早速、知り合いを介して輿水に会った松本は、「とにかくあなたのファンになったので、ぜひ一緒に仕事をしたい。水谷豊さんと土曜ワイド劇場を書いてほしい」と単刀直入に頼んだ

（前掲『相棒 警視庁ふたりだけの特命係』、246頁）。

輿水泰弘は、松本の突然の依頼をどう受け止めたのか？ ずっとコメデイタッチのドラマが専門で、サスペンスは書いたことがない。「申し訳ないけど当時、2時間ドラマには興味なかったんですよねえ（笑）」と輿水は振り返る（前掲『オフィシャルガイドブック 相棒』、132頁）。だが水谷豊と寺脇康文のドラマということには興味を引かれた。また男性2人のバディものは2時間ドラマとしては珍しいという話を聞いて挑戦する意欲もわいた。ただスケジュールが詰まっているので1年半待つてほしいと、輿水は松本に言った（同書、128頁）。

### 和泉聖治をメイン監督に

松本基弘としては、輿水泰弘が引き受けてくれたことにひとまず安堵した。だが脚本の完成が1年半後ということになると、水谷豊をだいぶ待たせることになる。2時間ドラマへの出演がひとつ途切れることにもなるし、当然ほかの仕事のスケジュールもあるだろう。果たして了承してもらえるのか？

だが水谷豊の返事は、「基弘を信じて待つよ」という極めて前向きなものだった（同書、128頁）。

水谷自身は、当時の心境をこう振り返る。「僕に1年余り待てるかどうかの打診もありましたが、推理サスペンスをあえてホームドラマが得意な脚本家で作る、という発想が面白いと

思いました」(水谷豊／松田美智子『水谷豊自伝』、163頁)。

またその裏側には、日本テレビのディレクターである水田伸生の存在もあった。水田は最近では子役時代の芦田愛菜が一躍注目された『Mother』(2010年放送)など坂元裕二脚本ドラマの演出で知られるが、キャリアは古く1980年代から演出家として活躍していた。

水谷はその水田とかねて親交があった。『浅見光彦ミステリー』などを企画した日本テレビのプロデューサー・小坂敬という、水谷にとつての恩人がある。水田はその小坂の弟子であり、さらに輿水泰弘が脚本を書いた一連の明石家さんま主演ドラマの演出も担当していた。水谷は、才能を高く買っていた水田と一緒に仕事をしている脚本家なら、と信じていることができた(同書、163頁)。

そして出来上がった初回の脚本を読んだとき、水谷は興奮した。「刑事物としてこんな本があるのかと驚いたし、とにかく面白かった」(同書、164頁)。

この脚本を映像化するにあたって、水谷豊は監督の人選にもこだわった。メインの演出として白羽の矢を立てたのが、和泉聖治である。

和泉は、ピンク映画の監督として多くの作品を演出した後、『オン・ザ・ロード』(1982年公開)で一般映画デビュー。『沙耶のいる透視図』(1986年公開)は、右京の元妻・たまき役で出演した高樹沙耶のデビュー作だった。松本基弘も、『南へ走れ、海の道を!』(1986年公開)という映画に感銘を受けていたので異存はなかった(前掲『オフィシャルガイドブック相棒』、128頁)。

また和泉は、映画のみならずVシネマやテレビドラマなどアクションものやヤクザものの演出を多く手掛けていた。そんな和泉と水谷豊は、『遮断機の下りる時』（フジテレビ系、1989年放送）というドラマで一緒になった。ただ、同作は刑事ドラマではなく、一緒に仕事をしたのもこの一度だけだった。それでも水谷は、「とてもアイデアが豊富な方」だと感心していたのである（前掲『水谷豊自伝』、164頁）。

松本基弘らとともに『相棒』のプロデューサーを務めた香月純一から演出の話を持ちかけられた和泉もまた、興水脚本に魅せられた。「まずストーリーが今までの刑事ドラマと全然違うところから入っていて、切り口が面白かった」。そしてこうも思った。「セリフが活き活きして、リアリティーがある。拳銃を持ったりはしないんだけど、セリフの中にいろんな感情とアクション的要素がいっぱいあるので、これをアクション劇で撮りたい」（前掲『オフィシャルガイドブック相棒』、136頁）。

『相棒』は、銃撃戦やカーチェイスのような派手なアクションシーンが売りの刑事ドラマではない。ここで和泉聖治が言いたいのは、セリフに込められたエモーショナルな感情の動き、その意味でのアクションを演出の力で表現したいということだろう。

和泉演出の特徴のひとつは長回しである。早速それは、プレシーズン第2話で威力を発揮した。クライマックスの場面、右京による謎解きが続く。オンエア上は回想場面が挟まれたが、現場では8分以上に及ぶ長回しの撮影だった（『杉下右京10years』、12頁）。

このときは水谷豊のほうが演技を止めなかつたというが、そこには感情の動きをぶつ切りにせず、演者のリアルな息遣いを伝えたいという和泉の意図もあつただろう。『相棒』ファンにはおなじみの右京の「ブルブル」（感情が高ぶると、セリフを言いながら頬がブルブルと震える）なども、そうした演者と演出の阿吽あうんの呼吸から生まれたものかもしれない。

『相棒』は、どこが新しかったのか？

水谷豊が、そして和泉聖治も絶賛した『相棒』初回の脚本は、具体的にどこが従来の刑事ドラマと違っていたのか？

輿水によれば、企画書段階でのタイトル案は「黄金刑事」というものだった。「ゴールデンコップス」と読む（『相棒 season2上』、373頁）。

ハリウッドのバディものを意識したそうだが、「刑事」を「コップ」と読ませる刑事ドラマは、それ以前から日本にもあつた。藤竜也と世良公則が主演のバディもの『ベイシテイ刑事』（テレビ朝日系、1987年放送開始）はそのひとつ。横浜を舞台にしたアクションもので、バブル期を感じさせる軽くオシャレな作風になっている。輿水の「黄金刑事」にもそんなニュアンスが感じられる。

だが2時間ドラマは、男女の愛憎や遺産相続などが絡み、ドロドロした人間の欲望の生々しさが売りのものが主流。結局このタイトル案は通らなかつた。しかし、輿水は脚本の随所

に2時間ドラマの既成概念を超えた新しいアイデアを盛り込んだ。

まず、杉下右京の人物設定。

この後でもふれるが、1970年代から活躍する水谷豊にはすでに代表作があった。『傷だらけの天使』（日本テレビ系、1974年放送）では、萩原健一演じる探偵事務所の調査員を兄貴と慕うチンピラ、『熱中時代』（日本テレビ系、1978年放送）では子どもたちと真摯に向き合う新任の小学校教師。一見正反対の役柄だが、一途でどこか憎めないという点では共通する。特に主演を務めた『熱中時代』は最終回の視聴率が40・0%を記録するなど、社会現象になった。それから時は過ぎて水谷も年齢を重ねてはいたが、そのとき植えつけられた実直さのイメージは根強かった。

それに対し、奥水泰弘が考えたのが「敬語で慇懃無礼いんぎんなキャラ」という癖のある役柄だった。表情ひとつ変えずに辛辣なことを言う皮肉屋である。プレシーズン第1話では、右京がミスをした亀山薫に対し、無表情に「無様」と言い放つ。奥水が水谷のマネージャーに確かめても、「そういう役は覚えがない」という返事だった（前掲『オフィシャルガイドブック相棒』、132頁）。要するに、変人である。協調性に乏しく、自分の興味の赴くままに振る舞う。だから事件の関係者に会いに行っても、通り一遍のことは聞かない。また自分の好きな趣味に関するものを見つければ、事件のことそっちのけで相手と話に花を咲かせてしまう。

従来の刑事ドラマに照らしてみても、このキャラクター設定は新しかった。刑事ドラマと

言えば、犯人にも同情してしまう人情派刑事かワイルドな風貌で犯人と派手な格闘を繰り広げるアクション派刑事。この2つのどちらかと相場は決まっていた。そのどちらでもない主人公像を狙ったわけである。

こうした右京のキャラクターは、刑事というよりは私立探偵に近い。輿水泰弘も「右京は名探偵のイメージです」と明言する（『ダ・ヴィンチ』2014年6月号、21頁）。実際、劇中では右京が「和製シャーロック・ホームズ」と呼ばれる。元々刑事ドラマには推理ものの要素があるが、正式な捜査権がないのに捜査をしてしまう特命係という設定、そして超絶推理で華麗な謎解きを披露する杉下右京のキャラクターは、きわめて私立探偵的だ。

ではなぜ探偵ものにしなかったのか？ 松本基弘によれば、「素人探偵ものは、主人公が事件に関わるまでにどうしても多くの段取りを踏まなくてはならない。その点、刑事は、ダイレクトに事件に関わり、なおかつ捜査をするのが仕事。やはり刑事がいいだろう」ということになった（前掲『相棒警視庁ふたりだけの特命係』、247・248頁）。

もうひとつ輿水がこだわったのは、社会派の要素を盛り込むことである。輿水は、『第一容疑者』や『心理探偵フィッツ』といったイギリスのミステリードラマのファンだった。そこでは、女性刑事が上司に性的暴行を受けるといった場面がリアルに描かれる。それは、「刑事」＝「ヒーロー」である従来の日本の刑事ドラマにはなかったものだった。輿水は、そうした固定観念にとらわれず社会問題や政治的なテーマ、時にはタブーとされているような題材を物

語に盛り込んだ。劇場版の第3作『相棒・劇場版Ⅲ・巨大密室！ 特命係 絶海の孤島へ』（2014年公開）で国防をテーマにしたのもそのひとつだ（前掲『ダ・ヴィンチ』、21頁）。早速プレシーズンの第3話でも、長年議論されている安楽死の問題が絡んでくる。

このようにして『相棒』は生まれた。この時点ではまだ連続ドラマ化が決まっていなかったので、あくまで『土曜ワイド劇場』のなかの1シリーズという扱い。後にシーズンを重ねるようになって、2時間ドラマ時代の『相棒』計3作は改めて「プレシーズン」と呼ばれるようになった。

ただ、試みの新しさゆえに当初はテレビ朝日局内で不安視されていた。2時間ドラマの視聴者層は女性が多く、男性2人のコンビものは絶対に当たらないと思われていたからである。だが松本は、水谷豊と女性を組み合わせるのが常識的なセオリーではないかという反対意見押し切った。

そして2000年6月3日に第1作が放送。17・7%と当時の2時間ドラマとしては高視聴率を記録した。さらに第2作に至っては、22・0%という20%超えの高視聴率。第3作の視聴率も17・4%と堅調で、ここから連続ドラマ化のプランが一気に具体化し、『相棒』は現在の長寿シリーズ化への道を歩み始めることになる。

## 2 不良と刑事を演じ続けた俳優・水谷豊

子役から始まった水谷豊のキャリア

俳優・水谷豊にとっても、『相棒』はライフワークとなった。放送がスタートしたのは、水谷が48歳のとき。73歳の現在に至るまで杉下右京というキャラクターを演じ続けてきた。『相棒』以外で水谷の姿を見ても、良し悪しは別として視聴者は「杉下右京」「右京さん」と反射的に連想するほどだろう。

もちろん、水谷豊という俳優なくして『相棒』は成立しなかった。それは、演技力の高さということだけではない。水谷豊のこれまでの俳優としての軌跡が、杉下右京というキャラクターには詰まっているからだ。

水谷が刑事役を演じたのは、『相棒』が初めてではない。それまでもドラマや映画で刑事役を度々演じてきた。水谷豊のキャリアにとって刑事という役柄はかなりの比重を占める。だが、それがすべてではない。特に「杉下右京」というミステリアスなキャラクターを理解するうえで、水谷が演じてきた刑事以外の役柄にも目を配ることが重要だ。

先述の通り、水谷豊は子役から俳優人生を始めた。

## 目次

はじめに 『相棒』という刑事ドラマの金字塔 3

1 2時間ドラマから連続ドラマへ『相棒』の誕生 3

2 不良と刑事を演じ続けた俳優・水谷豊 15

3 『相棒』が刑事ドラマの金字塔と言える理由 26

## 第1部 『相棒』の世界を解き明かす 49

1 人間・杉下右京の肖像 50

2 歴代相棒を深掘りする 62

3 警察ドラマ『相棒』があぶり出す権力と法の関係 83

4 『相棒』の警察組織をかたちづくる人びと 92

5 個性豊か、右京と歴代相棒に縁の深い市井の人びと 112

6 多彩な脚本家たち、多様な作風く本格推理ものから社会派まで 129

7 テレビ朝日と東映く刑事ドラマづくりの伝統と革新 146

コラム1 タイトルバックと音楽 158

## 第2部 厳選！傑作回47本を深掘りする 161

1 プレシーズン第1作 「相棒く警視庁ふたりだけの特命係く刑事が警官を殺した？ 赤いドレスの女に誘惑され：死体に残る4ー3の謎とは？」 163

プレシーズン第2作 「相棒2く警視庁ふたりだけの特命係く平成の切り裂き魔連続殺人!! サイズの合わないスカートをはいた女の死体…」 163

プレシーズン第3作 「相棒3く警視庁ふたりだけの特命係く大学病院助教授、墜落殺人事件！ 日付けの違う乗車券の謎と、死体が語る美人外科医の秘密」 163

2 シーズン1第7話 「殺しのカクテル」 173

3 シーズン1第11話 「右京撃たれる特命係15年目の真実」 178

- シーズン1第12話 「特命係、最後の事件」 178  
 シーズン2第3話 「殺人晩餐会」 186  
 シーズン2第21話 「私刑」 190  
 シーズン3第1話 「双頭の悪魔」 195  
 シーズン3第2話 「双頭の悪魔Ⅱ〜墮天使」 195  
 シーズン3第3話 「双頭の悪魔Ⅲ〜悪徳の連鎖」 195  
 シーズン4第4話 「密やかな連続殺人」 204  
 シーズン4第5話 「悪魔の囁き」 204  
 シーズン5第11話 「バベルの塔〜史上最悪のカウントダウン! 爆破予告ホテルの罠」 211  
 シーズン5第13話 「Wの悲喜劇」 220  
 シーズン6第19話 「黙示録」 225  
 シーズン7第8話 「レベル4〜前篇」 233  
 シーズン7第9話 「レベル4〜後篇・薫最後の事件」 233  
 シーズン7第15話 「密愛」 240  
 シーズン8第1話 「カナリアの娘」 246  
 シーズン9第8話 「ボーダーライン」 251  
 シーズン9第16話 「監察対象 杉下右京」 258

	16	シーズン10 第10話 「ピエロ」	264
	17	シーズン11 第11話 「アリス」	272
	18	シーズン11 第18話 「BIRTHDAY」	282
	19	シーズン12 第13話 「右京さんの友達」	287
	20	シーズン13 第19話 「ダークナイト」	292
	21	シーズン14 第5話 「2045」	300
	22	シーズン14 第16話 「右京の同級生」	304
	23	シーズン15 第4話 「出来心」	311
	24	シーズン16 第8話 「ドグマ」	315
	25	シーズン17 第6話 「ブラックパールの女」	320
	26	シーズン18 第7話 「ご縁」	325
	27	シーズン18 第14話 「善悪の彼岸〜ピエタ」	332
		シーズン18 第15話 「善悪の彼岸〜深淵」	332
	28	シーズン19 第11話 「オマエニツミハ」	344
	29	シーズン20 第16話 「ある晴れた日の殺人」	352
	30	シーズン21 第1話 「ペルソナ・ノン・グラッター〜殺人招待状」	358
		シーズン21 第2話 「ペルソナ・ノン・グラッター〜二重の陰謀」	358

- 31 シーズン21第4話「最後の晩餐」 368
- 32 シーズン22第10話「サイレント・タトゥー」 375
- 33 シーズン22第19話「トレードオフ」 381
- シーズン22第20話「トレードオフ」AI右京の完全推理」 382
- 34 シーズン23第18話「怪物と聖剣」 389
- シーズン23第19話「怪物と聖剣」決戦」 389
- 35 シーズン24第8話「梟は夜に飛ぶ」 399
- 36 映画「相棒―劇場版II―警視庁占拠！ 特命係の一番長い夜」(2010年) 405

コラム2 意外な出演者 416

各シーズン解題 主な登場人物、出来事、流れ、特徴など 419

プレシーズン (2000年6月3日、2001年1月27日、同11月10日放送) 420

シーズン1 (2002年10月9日〜2002年12月25日放送) 全12話 420

シーズン2 (2003年10月8日〜2004年3月17日放送) 全21話 421

シーズン 3	(2004年10月13日～2005年3月23日放送)	全19話	421
シーズン 4	(2005年10月12日～2006年3月15日放送)	全21話	422
シーズン 5	(2006年10月11日～2007年3月14日放送)	全20話	422
シーズン 6	(2007年10月24日～2008年3月19日放送)	全19話	422
シーズン 7	(2008年10月22日～2009年3月18日放送)	全19話	423
シーズン 8	(2009年10月14日～2010年3月10日放送)	全19話	423
シーズン 9	(2010年10月20日～2011年3月9日放送)	全18話	424
シーズン 10	(2011年10月19日～2012年3月21日放送)	全19話	424
シーズン 11	(2012年10月10日～2013年3月20日放送)	全19話	425
シーズン 12	(2013年10月16日～2014年3月19日放送)	全19話	425
シーズン 13	(2014年10月15日～2015年3月18日放送)	全19話	426
シーズン 14	(2015年10月14日～2016年3月16日放送)	全20話	426
シーズン 15	(2016年10月12日～2017年3月22日放送)	全18話	427
シーズン 16	(2017年10月18日～2018年3月14日放送)	全20話	428
シーズン 17	(2018年10月17日～2019年3月20日放送)	全20話	428
シーズン 18	(2019年10月9日～2020年3月18日放送)	全20話	429
シーズン 19	(2020年10月14日～2021年3月17日放送)	全20話	429

シーズン 20	(2021年10月13日～2022年3月23日放送)	全20話	430
シーズン 21	(2022年10月12日～2023年3月15日放送)	全21話	430
シーズン 22	(2023年10月18日～2024年3月13日放送)	全20話	431
シーズン 23	(2024年10月16日～2025年3月12日放送)	全19話	431
シーズン 24	(2025年10月15日～2026年3月11日放送)	全19話	432

警察官の階級および対応する警視庁の役職

433

参考文献

434

おわりに 変わり者たちの饗宴

436

第

1

部

『相棒』の世界を

解き明かす

このパートでは、多彩で個性的な登場人物、警察ドラマとしての特質、脚本や制作システムの独自性と画期性など、さらに深く『相棒』の世界に光を当てる。

刑事ドラマを見る多くの視聴者の関心は、おそらく「犯人探し」にあるだろう。それはジャンルのにも当然のことで、『相棒』が人気を博する理由も鮮やかな推理劇としての面白さにあるのは間違いない。だがそれ以外の部分の魅力にこそ、『相棒』の『相棒』たる所以があるというのもまた紛れもない真実だ。このあと第2部で傑作回を読み解いていくが、その準備も兼ねてみていきたい。

# 1 人間・杉下右京の肖像

## 浮世離れた警察官

まず、『相棒』の世界そのものと言っても過言ではない杉下右京について。

「はじめに」でも、杉下右京の人物像について述べた。ただそこでは刑事としての職業倫理、正義をめぐる姿勢が主なテーマだった。

ここでは、右京のより具体的な人物像を掘り下げてみたい。ちなみに「右京」という名前

は、1970年代の人気ドラマ『パパと叫ばないで』（日本テレビ系、1972年放送開始。子役時代の杉田かおるがブレイクしたことも有名）で石立鉄男が演じた「安武右京」という役名からとられたものだ。ただ『パパと叫ばないで』はホームドラマで、石立は刑事役でもない。「杉下」については色々試してみても「右京」と組み合わせたときの語感の良さで決めたという。

いうまでもなく、杉下右京の職業は警察官。警視庁特命係に所属している。庁内で「島流し」と揶揄される特命係には捜査権がない。だから厳密には右京を「刑事」とは呼べない。だがそんなことはどこ吹く風で、右京ら特命係は事件現場にどこからともなく姿を現し、勝手に捜査を進め、捜査一課の伊丹らから煙たがられる。

階級としては警部。東京大学法学部首席卒業で、国家公務員I種試験（現・国家公務員上級試験）に合格して警察庁に入ったバリバリのキャリアである。経歴と年齢から言うともっと昇進しておかしくないが、本人は出世にまったく興味が無い。キャリア組は警部補からスタートして入庁後の研修を終えた時点ですぐに警部になるので、階級としてはほぼ最初からそのままということになる（ただプレシーズン第1作では「警部補」と表示され、階級についてはやや曖昧な面もある）。

20代のときに3年間スコットランドヤードでの研修を経験。その後も休暇中に訪れたりしている。そして研修からの帰国後、警察庁から警視庁刑事部捜査二課に出向となった。知られるように、脱税や収賄などの経済事件、知能犯罪を主に担当する部署である。

その出向時に外務省高官・北条晴臣（長門裕之）の邸宅で人質籠城事件が発生し、急きよ編成された対策チームの作戦参謀に任命された。チーム名は「緊急対策特命係」。そのリーダーだったのが、当時公安部にいた小野田公顕である。そこで右京と小野田は作戦方針をめぐって激しく対立。結局小野田が主張する強行突入策を執行したが失敗し、犠牲者が出た。右京は、その責任を取らされるかたちで新設された特命係に追いやられることになる。

このような警察での経歴は、劇中で折にふれて明らかにされる。だが一方、プライベートな部分は謎にまつまれている。元々刑事ドラマでは、刑事の私生活はそれほど克明に描かれないところはある。しかし、家族のことや家に帰ったときのくつろいだ姿などが描写されることも少なくない。ところが右京の場合は、それがまったくない。結婚歴があることは明かされるが、現在ほどのような私生活を送っているのかはごく断片的な情報でしかわからない。年齢についても謎だ。2002年放送のシーズン1の時点では右京は45歳とされている。単純計算では、2026年のシーズン24の時点で右京は68歳か69歳くらいということになる。そうなると当然、定年という問題が出てくる。もちろんドラマと現実の時間経過は必ずしも一致するわけではなく、そこをつくのは野暮かもしれない。ただ、あるインタビューでは、水谷豊は右京が「順調に歳を取ってきていない」と冗談交じりに語っている。右京は「3年ごとに1歳ずつ取っているような感覚」であると（前掲『杉下右京10years』、22頁）。

結局そういうこともあり、杉下右京はどこか浮世離れしている。例えば、よく見なければ

ばわからない程度に存在自体が地面から浮いているとも言うべきだろうか。キャリアでありながら出世に無関心というところもそうだが、勤務中のとき以外はなにをしているのか？ 特命係の部屋で読書をしたりチェスをしたりしていることもある。夜には行きつけの小料理屋「花の里」(この店名は、右京の遠縁にあたる杉下花(原沙知絵)の名前に由来する)で夕食を兼ねて一杯というのがお決まりのようだ。なじみの女将のいる酒場でエンディングということでは、藤田まこと主演の『はぐれ刑事純情派』を思い出す部分もある。

「花の里」の初代女将は右京の元妻のたまき(高樹沙耶)。結婚期間はおよそ1年。離婚後も食事や映画に出かけるなど一緒に行動するパターンも多く、仲睦まじい。たまきを「家族以上の存在」だと表現したこともある(シーズン2第9話)。一方たまきは離婚の理由を「頑固で不器用で天邪鬼なところに惚れたんだけど、頑固で不器用で天邪鬼だから、夫としては最低です」(シリーズ第1話)と表現していた。そのまま素直に受け取れば、結婚生活に向いていないということだろう。

たまきがいなくなつて以降は、2代目女将の月本幸子(鈴木杏樹)、さらに現在の女将(小料理屋の名称は「こてまり」に変わった)の小出茉莉(森口瑤子)へと受け継がれ、両者とそれぞれなんとなくいい雰囲気はあるが、「恋愛」と呼べるような感じではない。年齢が年齢だからというのもあるかもしれないが、それ以前に杉下右京に「恋愛」という二文字は結びつかない。そこでも生身の人間感は薄い。

## 捜査以外はすべて「余暇」――杉下右京の多彩な趣味の世界

右京の浮世離れ具合は、趣味の多彩さにも表れている。どの趣味をとっても仕事と同様にとことん突き詰めるタイプ。それゆえ周囲がついていけず、しばしば呆れられる。時にはその知識が真犯人を突き止めるのに役立つこともあるが、あくまで趣味は趣味なのでそれ自体は実益にまったく結びつかない。

まず、紅茶への偏愛は有名だろう。いつも着ている3つボタンのスーツもそうだが、右京の英国趣味のひとつだ。初期にはコーヒーを飲んでいることもあったが、いまでは紅茶一筋。ティーポットを高く掲げて紅茶を注ぐアクロバティックなスタイルは、もはやトレードマークである。むろん茶葉のことにも精通している。紅茶の専門店にもよく足を運んでいるようだ。そこで出会った人物が事件に関わっているということもある。ただどんな相手であったとしても、紅茶への蘊蓄うんちくを傾け合うことは無上の喜びのようだ。

落語も詳しい。寄席にも足を運ぶ。シーズン1第3話「秘密の元アイドル妻」では、知り合いの落語家（小宮孝泰）を巻き込んだ事件が起こるといふ流れだった。鑑識の米沢（六角精児）も同じく大の落語好き。勤務中でも古今亭志ん生の素晴らしさをともに語り合ったり、落語のCD（テープ）を貸し借りしたりする趣味仲間だ。

チェスもある。職場であるはずの特命係の部屋にはおしゃれなデザインの駒とチェス盤が常に置いてあって、誰かと対戦していたりする。シーズン14第5話「2045」では、最先

端の人工知能とも対戦した。神戸尊とは盤を介さず棋譜を暗記して脳内対局をしたことも（シーズン8第8話）。対局の棋譜が事件解決のヒントになったこともある（劇場版第1作）。

ほかにもクラシック音楽（ピアノを弾けたりもする）や絵画など芸術鑑賞、そして読書など、とにかく興味の幅が広い。

実際、刑事ドラマにおいて、事件絡みでこれほど絵画や画家の話が頻繁に登場する作品も珍しいだろう。読書に関しては、小説家などが事件関係者だったりすると、たいていその作品も読破済みで滔々とうとうと魅力を語ったりする。またシェイクスピアのセリフを即興で諳そらんじる場面も（シーズン19第6話）。さらに科学者が書いた専門的な論文までも読んでいる。さすがに論文については捜査関連の場合が多いが、そういうことはその筋の専門家に聞くのが普通だろう。それを自分で調べ、なおかつ読んでしまうところが変わっている。さらには辞書を愛読書にしているらしい（シーズン17第3話）。博覧強記なのもさもありなんといったところである。

隣の部屋の薬物銃器対策課課長・角田六郎（山西惇）が「暇か？」と言いながらコーヒを貰いに特命係の部屋に入ってくるのが『相棒』の名物だが、その言葉を借りれば、捜査しているとき以外は右京にとってすべての時間が「余暇」なのかもしれない。朝食はご飯派かパン派か？ どんな間取りの家に住んでいるのか？ ごく私的な友人関係などはどうなっているのか？ といった普通の生活部分についてはまったく見えない。ただただ森羅万象への知的好奇心のみで生きている。それが私たちの目に映る杉下右京だ。

## 杉下右京はなぜ、幽霊を信じるのか

興味深いのは、そんな右京が幽霊の存在を固く信じていることだ。一般的な趣味とは同列に並べられないかもしれないが、なにかのきっかけで幽霊の話になると突然テンションが上がり、饒舌になる。

ただほかの趣味と違うのは、好きなきに見たり聞いたり味わったりできないことだ。幽霊の存在を信じていながら、実は自分では一度も幽霊を見たことがない。見たというひとがいると、身を乗り出して興味津々で質問攻めにする。こと幽霊に関しては、ワクワクを隠せないようだ。

シーズン11第10話「猛き祈り」。休日にキノコ狩りに出かけた甲斐享が何者かに暴行され、瀕死の重傷を負う。そして事件解決後、まだ入院している享のもとにひとりの老人（前田昌明）が訪ねてきて笑顔で話しかける。実は彼は事件の関係者なのだが、すでに亡くなっている。つまり、幽霊だったのだ。その話を聞くと右京はいきなり周囲の人間に「あなた、（幽霊を）ご覧になったことは？」と興奮気味に尋ね、「実は僕もいまだかつて見たことがないんですよー」と大げさに残念がる。

銀縁のメガネで、英国紳士流のかっちりしたスーツ姿、そしてほとんど表情を崩さない普段の右京は、物事を万事合理的に判断し、対処するタイプの人間に見える。だが必ずしもそうではなく、合理性だけでは推し量れないものへの強い好奇心を抱いているのがこの場面か

らもわかる。

そこには、シャーロック・ホームズシリーズの生みの親である作家コナン・ドイルを想起させる面もある。

名探偵シャーロック・ホームズが誕生したのは、19世紀末のイギリス。つまり、世紀末のことだった。当時ヨーロッパでは後にシュペングラーの著書名にもなった「西洋の没落」への危惧が真剣に議論され、退廃気分が世を覆っていた。犯罪史上でも有名な、次々と女性を襲う「切り裂きジャック」による連続殺人事件が起こってロンドン市民を震撼させたのもこの頃である。

ドイルは小説家であるだけでなく、心霊研究者でもあった。降霊術などさまざまな心霊現象を熱心に研究していた。個人の嗜好もむろんあっただろうが、そこにはいま述べた世紀末的空気感の影響もあったはずだ。実際、当時心霊現象に興味を抱く人たちのサークルは数多く存在した。

右京の幽霊への強い関心という設定も、もしかするとこのドイルとその時代のエピソードにヒントを得たものかもしれない。

ドイルに倣ったのかどうかはわからないが、右京は推理小説を書いたこともある。タイトルは「亡霊たちの咆哮」。シーズン4第8話「監禁」のなかに登場する。内容は、第二次世界大戦の敗戦直前に旧日本軍の秘密結社が隠したとされる金塊をめぐるミステリー。驚くべき

は、これを中学生のときに書いたことだ。大学の同人誌にも掲載され、早熟の天才として一部で話題を呼んだ。画面でチラつと冒頭のところが映されていたが、とても中学生が書く文章とは思えない大人びたもので、後の右京を彷彿とさせる（この小説が掲載された同人誌は、シーズン24第11話に再び登場する）。ちなみにこの回は、『都民ジャーナル』という雑誌で右京が警視庁の「和製シャーロック・ホームズ」として紹介されたところから始まる。

だが、右京には右京ならではの幽霊に関心を抱く理由もあるだろう。

思うに杉下右京という人物は、人間の思いが持つ力というものを人一倍信じているのではあるまいか。確かに皮肉屋でとつつきにくい。浮世離れもしている。しかしこころの奥底では、人間の抱く感情や情念というものの持つ力を尊重している。それは情にもろいということではなく、強い思いはそれを必要とする誰かに必ず届くということである。そう信じる気持ちだが、どこかで幽霊の存在を信じることにつながっているように思える。

実は、先述の「猛き祈り」の老人は弱い立場に置かれている人びとに年齢や性別を問わず手を差し伸べ、共同生活を送っていた。だが世界には戦禍や災害（老人の部屋の新聞記事にはボランティアで薫がいる「サルウィン」の災害の記事もある）がずっと絶えないことを憂い、即身仏になることを決意したのだった。そしてその老人は享のもとに幽霊として現れ、「申し訳ありませんでしたねえ」と共同生活者たちが引き起こした享への暴力行為を謝罪する。肉体は滅んでも思いは残る。

## 「銃は嫌いです」〜杉下右京の拳銃観

そう考えると、右京が拳銃を嫌悪することにも合点がいく。「相棒」には警察が犯人を狙撃するシーンも何度かあるが、右京がそこに加わることはない。

シーズン2第4話「消える銃弾」は、右京の拳銃観が明らかになる回だ。雑誌記者が銃で撃たれ、殺される事件が起こる。だが傷跡から見て体内に残っているはずの銃弾が見つからない。そこで右京はかねての知り合いで改造銃に精通した笹篠（下條アトム）という男に話を聞きに行く。

この回は、警視庁内の訓練場で薫が射撃訓練をしている場面から始まる。見事な腕前だ。元々は捜査一課にいただけはある。この時点では、あわよくば捜査一課に戻りたいという気持ちもある。訓練に怠りない。

薫が「右京さんはやらないんですか？」と聞く。すると右京（射撃訓練場に紅茶を入れたガラスポットとティーカップを持ってきている）は言下にこう答える。「銃は嫌いです。銃を使えば血が流れるし、相手に致命傷を与えます。警察もいつまでこんな野蠻で旧式な武器を使っているんでしょうねえ。弾もタダではありません。税金の無駄遣いです」。

実は右京が笹篠を知っていたのは、彼に「致命傷を与えず血も流さないスタンガンのようにショックを与えるだけの安全で安心な銃」ができなにか相談したことがあったからだ。そこまでやろうとしたことに、右京の銃に対する嫌悪感の根深さが伝わってくる。

『相棒』に限らず、刑事ドラマには銃をモチーフにした回が必ずある。そしてそこには、「刑事とはなにか」という本質的な問いを含んでいることも珍しくない。

『太陽にほえろ！』のゴリさんこと石塚誠（竜雷太）は、警視庁でも指折りの銃の名手。だが、携行している銃に弾を込めていない。銃には殺傷能力があり、意図しなくても誰かの命を奪ってしまう可能性がある。それはゴリさんにとって許されないことだ。だから弾を込めない。このあたりは、右京の考えかたにも近い。『古畑任三郎』シリーズ（フジテレビ系、1994年放送開始）の古畑任三郎（田村正和）は、もつと徹底している。ドラマ自体が純粹な推理劇だからということもあるが、古畑も銃を撃つことはないし、そもそも銃を持っていない。

そこには、古畑なりの確たる理由がある。

第1シーズン最終話で、古畑は上司の小暮（菅原文太）に「人を裁く権利は我々にはありません。我々の仕事はただ事実を導き出すだけです」と毅然とした態度で語る。実は小暮は、自分の孫娘を殺した男を銃で殺していた。最後、古畑の推理によってアリバイを崩された小暮は、「納得がいったよ。君に拳銃は必要ない」と言う。その言葉に古畑は、「警視、最高の褒め言葉です」と喜びをあらわにする。

銃を使わないという信念において、古畑と右京はいわば同志だ。もちろんその前提には銃にも劣らない武器になる秀でた推理力の持ち主だということがある。しかし、推理力があつたとしても、銃を持ち、撃つことを選択することもできる。その点、銃を拒絶する2人が掛

け値なしの理想主義者であることに変わりはない。たとえ相手が犯罪者であったとしても、人を動かすのは言葉であり、その裏側にある強い思いなのだ。

### 一周回った「青臭さ」〜両義性の魅力

ここには、隠しても隠しきれない「青臭さ」が感じられる。そして、「はじめに」でも述べたような、若き日の水谷豊が演じ続けた「孤独な若者」の匂いも漂っている。年齢を重ね、落ち着き払ったポーカーフェイスからは青臭さなど微塵も感じられない右京だが、一皮むいてみれば十分青臭い。たとえば、シリーズ第2話「特命係復活」では、「私は穏やかな人間です。争いごとは好みません」と断りつつも、「しかし売られた喧嘩は買いますよ。そして、必ず勝ちます」と断固とした口調で言い放つ。

また「命より大事なものなどないんですよっ！」などと、頬をプルプル震わせながら静かに犯人への憤りをあらわにする右京もおなじみだ。もちろんそう考える刑事は多いだろう。だが、それをわざわざ感情もあらわに口にする刑事はあまりいないように思う。熱血刑事には見えないが、実は誰よりも熱血。これ以上ないほど真っ直ぐで純粋なのではないか。それを浮世離れた風情でいつもは決して見せないのが、杉下右京という人間にほかならない。

その意味では、右京は大人のようにも子どものようにもある。言い換えれば、大人と子どもとの中間にいて、いつまでも屈折したものを抱えている若者のようだ。うがった見方をすれ

ば、劇中では年齢不詳というのも、もしかすると右京の永遠の青臭さを踏まえたものなのかもしれない。複雑そうでありながら単純。ひねくれていると同時に純粹。これ以上ない矛盾のかたまりだ。

「はじめに」で右京は「殉職しなかったマカロニ」と書いたが、それを別の言いかたで表現すれば「一周回った「青臭さ」」ということになるだろう。その魅力的な両義性ゆえに、私たちは杉下右京という存在からつい目を離せなくなってしまうのだ。

## 2 歴代相棒を深掘りする

「か」で始まり、「る」で終わる4人の相棒

杉下右京の相棒は、これまで4人いる。ほかに「特命係第三の男」と呼ばれる陣川公平（原田龍二）、青木年男（浅利陽介）、姉川聖子（田畑智子）など特命係に一時的に配属されて相棒的な役割を果たした人物はいるが、ここではレギュラー的な存在という意味で4人に話を絞る。

初代が亀山薫（寺脇康文）、2代目が神戸尊（及川光博）、3代目が甲斐享（成宮寛貴）、そし

第

2

部

厳選！傑作回47本を  
深掘りする

以下、厳選した傑作回（珍作、意欲作といったものも含める）を深掘りしていく。できれば全話取り上げたいところではあるが、膨大な量になるため、最低限のものを筆者の独断で選んだラインナップであることをご容赦いただければと思う。各シーズンで必ず1話以上取り上げることをいちおうのルールにしている。

ここでは、各回の見どころはもちろんのこと、各回が他の回とさまざまなポイントでつながっていることも明らかにする。そうすることで、一話完結形式でありながら、ある種大河ドラマのような群像劇としての魅力を併せ持つことがより鮮明になると考えるからだ。同じ回を繰り返し見ても飽きず、新たな発見があるのが『相棒』だ。だから、テレビ朝日でずっと夕方の再放送が続くのだろう。

つまり、犯人探しの部分だけでなく、人間ドラマや社会派ドラマとしての深みに迫ることがこの第2部の大きな目的である。以下、各回についてあらずじ、印象的なセリフ、注目ポイント、そして筆者なりの解釈や補足を交えながら述べていくが、それゆえ物語の展開や結末への言及などいわゆる「ネタバレ」があることをあらかじめお断りしておく。

シーズン24第11話「老人と寧々」は、ミステリーのネタバレをする犯人探しの話だった。そこに登場する大学のミステリー研究会に所属する大門寺寧々（茅島みずき）は、「ネタバレ御法度。犯人は市中引き回しのうえ、打ち首獄門だわ!」と厳しく断罪していた。おっしゃる通りとしか言いようがないが、ここはあえて大罪を犯すことにしたい。

# 1

プレシーズン第1作 「相棒」警視庁ふたりだけの特命係「刑事が警官を殺した？ 赤いドレス

の女に誘惑され…死体に残る4・3の謎とは？」（2000年6月3日放送）

プレシーズン第2作 「相棒2」警視庁ふたりだけの特命係「平成の切り裂き魔連続殺人!! サ

イズの合わないスカートをはいた女の死体…」（2001年1月27日放送）

プレシーズン第3作 「相棒3」警視庁ふたりだけの特命係「大学病院助教授、墜落殺人事件！

日付の違う乗車券の謎と、死体が語る美人外科医の秘密」

（2001年11月10日放送）

脚本…奥水泰弘 監督…和泉聖治

亀山薫が特命係へ「島流し」、そして浅倉禄郎の登場

「土曜ワイド劇場」から始まった『相棒』。当時2時間ドラマの主な視聴者は女性だったため、企画段階では男性2人の主人公に難色を示す意見もあった。そんななかでようやくスタートした『相棒』には、「警視庁ふたりだけの特命係」といういかにも2時間ドラマらしいサブタイトルが付されていた。各回のタイトルもいまと比べるとかなり長く、かつ煽情的で、やはり2時間ドラマの匂いがある。

まだ捜査一課だった亀山薫は、たまたま入った食堂で指名手配犯を発見する。そこまではよかったが、応援を呼ばずひとりで捕まえようとしてしまう。だがそれが裏目に出て人質にされ、籠城事件に発展してしまふ。つまり単独行動で墓穴を掘ったわけで、「相棒」の大切さを逆に浮かび上がらせた出だしの場面とも言える。

テレビで生中継される籠城事件の様子を見ていた杉下右京。携帯電話から大音量を流して犯人の隙を突く策で事件を解決に導くという頭脳プレーをいきなり披露する。だが薫はこの失態で「人材の墓場」と評判の特命係に島流しに。右京との出会いである。

普段の特命係はと言えば、とても「暇」そうだ（と言っても、角田課長はまだ登場しない）。なにをやっているかと思えば、摘発で押収された裏ビデオの内容を確認する作業であったりする。そんな仕事でもいっさい手抜きすることなく、冷静にずっとチェックしている右京がなんとも可笑しい。だが薫は、捜査の最前線に立つ花形部署の捜査一課とのあまりの落差がっかりする。しかも右京は遠慮などまったくなく、薫の失敗を面と向かって「無様」と切り捨てる。

踏んだり蹴ったりというわけで、バーでヤケ酒を食らう薫。すると赤いドレスを着た女性が近づいてくる。誘惑された薫は酔っ払った勢いで付いて行ってしまふ。そしてそこから思ひもよらぬ方向に話が展開していく…。

まだこの時点の亀山薫には、あの颯爽とした感じはあまりない。失敗したのは仕方ないが、

左遷されて不貞腐れ、あげくの果てに美和子という恋人がいながらふらふらと見知らぬ女性の誘いに乗ってしまう。

だが熱さだけは誰にも負けない。猪突猛進のきらいがあり、それが食堂での失敗の原因でもあるが、その真っ直ぐさこそが薫の真骨頂だ。最初は冷淡だった右京も、その熱さにふれて少しずつ薫に対する態度を変えていく。

この第1作では、警察内部での犯罪が描かれる。組織的な大がかりなものではないが、拳銃の横流しという重大な罪だ。連ドラ化以降の『相棒』が担う警察ドラマとしての一面を早くも予告していたと言えるだろう。

そして第2作では、連続殺人犯「平成の切り裂きジャック」こと浅倉禄郎（生瀬勝久）が登場する。薫、そして美和子とは大学時代からの親友であり、そのことが単なる勧善懲悪とは異なる物語の厚みをもたらしているのは前述した通りだ。

浅倉は、東京地検の検事。切れ者として知られ、地検のエース的存在である。だがその裏で、若い女性をターゲットに次々と殺人を犯す。

この回は、やはり右京と浅倉の対決が興味をかきたてる。「和製シャーロック・ホームズ」という呼び名はこの時点ではまだないが、名探偵としての右京を前面に押し出した回である。「暇か？」の角田課長は、この回が初登場。「特別に命令があればなんでもする係」だが、実は「特別に命令のない係」と自嘲気味だった薫は、角田からの違法薬物捜査の張込み協力依

頼に飛びつく。だが張込み対象の追跡中、右京が偶然女性の他殺死体を発見。その現場にやってきたのが、東京地検の浅倉とその助手の市村麻衣子（渡辺典子）だった。薫と浅倉は久々の再会を果たす。

被害者は連続殺人事件5人目の犠牲者。年齢や職業はバラバラで、共通点は見つかからない。だが5人目の被害者だけ、スカートが半開きになっていたことに右京は違和感を抱く。過去4件では、性的暴行の痕跡はなかった。それは今回も同様だと鑑識の米沢は言う。とすれば、被害者はサイズの小さいスカートをわざわざはいていたことになる。

そうしたなか、右京と薫は顔見知りの女子高校生・今宮典子（仲根かすみ）を売春容疑で捕まえる。すると買春容疑で事情聴取をした男から、テレクラで知り合った女性が殺されたという話を聞く。「平成の切り裂きジャック」の被害者のひとりだった。ロンドンの切り裂きジャック事件でも、ターゲットになったのは娼婦だった。

小さなスカートを買ったのは市村だった。ところが、容疑者となった市村は遺体で発見される。自殺と断定されるが、右京は浅倉の犯行を疑う。親友を疑う右京を「推理ゲームを楽しんでるだけ」と薫は非難する。

そこに、5人目の被害者の遺体発見現場である公園の近くで浅倉を見たという典子の証言が飛び出す。調べると、浅倉のその時々への赴任地で切り裂きジャックの事件は起こっていた。一連の事件の前にかつての婚約者が亡くなった状況にも疑わしいものがある。

証言をした典子が浅倉に拉致されるが、薫が監禁場所に駆けつけ、浅倉を捕まえる。だが浅倉は、「お前に俺が捕まえられるか？ 罪状は何だ？」と不敵な笑みを浮かべる。「お前、本当に浅倉なのか？ 俺の知ってる浅倉なのか？」「そうだよ。大学時代の仲良しの浅倉だよ。俺を殺人犯で逮捕したければ、証拠を持ってこい！」。

そこに、右京が姿を現す。血痕つきのスカートを持っている。浅倉と交際していた市村は、秘かに浅倉の犯行を知って被害者のスカートを取り換えた。だが自ら犯した罪の重さに耐えかね、右京に証拠となるスカートを送ってきたのだ。浅倉は逮捕される。

お手柄と言いたいところだが、後日内村と中園がわざわざ特命係の部屋までやってきて「スタンドプレーをするな」と釘を刺して帰って行く。「あいつら、俺たちよりも暇みたい」「同感です」。そして暇を持て余した2人はマッチ棒の塔づくりに興じる。このあたりはまだ右京にスタイリッシュさもあまりなく、本当に暇な感じが伝わってくる場面である。

浅倉は、殺人という行為に偏執的にとらわれた快楽犯ではない。罪を犯す明確な動機がある。そのあたりは、2時間ドラマに求められるわかりやすさを優先したという面もあるかもしれない。

母子家庭で育った浅倉の母親は、娼婦だった。自分の父親は誰かわからない。そのことでひどいいじめも受けた。そして恨みを募らせた浅倉は、事故を装い母親を殺害する。それがバレないまま成人して婚約もした。しかし、その女性も陰で売春をした過去があった。浅倉

は、ここでも巧妙に婚約者を殺す。

売春をする女性への強い嫌悪から来る処罰感情。それが動機である。逮捕の場面、そういう女性がいる限り殺人への衝動を抑えられないと苦しそうに吐露する浅倉に、こうして捕まれば「もうあなたは誰も殺すことはありません」と右京は答える。「ありがとう」と素直に感謝する浅倉。

その動機を知った薫は、たとえ凶悪な連続殺人犯であるとしても、浅倉を放つてはおけない。親友を簡単には見捨てられない。

シーン5話「目撃者」。子役時代の染谷将太の卓抜な演技が見られるこの回は、染谷演じる小学生が殺人の罪を犯す。しかも完全犯罪を目論んだ計画的なもの。浅倉と似ている。少年の将来を危惧した薫は拘留所の浅倉のもとに面会に向かい、話をしてくれと頼む。浅倉も、薫の意を汲んで完全犯罪を目論むことの虚しさを自分の運命になぞらえて少年に説く。

この時点では、現在のような「チーム特命係」はまだ出来上がっていない。そもそも米沢と特命係は、この回が初対面。協力的ではあるが、まだ一体感はない。肝心の右京と薫の信頼関係もまだまだ。特命係に配属されてあからさまにやる気のない薫に右京が真面目に説教をする場面も。とはいえ、薫の天性の人懐っこさに右京がふと和らぐところもあって、2人の距離感が面白い。

また生瀬勝久の演技、特に見開いた目の表情が絶妙だ。クライマックスの倉庫の場面では、

巨大なクレーン台で昇っていく浅倉の顔を下からとらえた映像などはとても印象的である。

### 「俺の相棒はどこだ！」〜右京危機一髪の第3作

続いて、プレシーズン最終話となる第3作。

化学薬品工場で爆発事故が起こり、多数のけが人が出る。受け入れ先の大学病院の前ではテレビの生中継が。薫も自宅で見ている。すると担架で運びこまれる人びとのなかに見慣れた顔が。右京だ。なぜかカメラ目線。飲んでいたコーヒーを吹き出す薫。お遊び感はこの頃から健在だ。

右京は爆発事故に遭ったわけではなく、盲腸。手術も無事終了したが、しばらく入院となる。爆発事故の影響で空気が個室しかないのです、右京はそこに。薫、美和子、たまきも慌てて駆けつける。

右京が入院するというパターンは以後何度かあるが、その最初である。この場合は、爆発事故に巻き込まれたかと一瞬思わせておいて…、という手の込んだものになっている。本筋の事件は、その後起こる。

右京と薫は、男性が病院の屋上から転落死する瞬間を個室の窓から目撃する。「物騒な病院ですなあ」とここでも変わらず冷静な右京。男性は、大学病院の外科の助教授である今井貞一（中丸新将）だった。遺書もあり自殺と考えられたが、今井のズボンのベルト通しなぜか

ちぎれているなど不審な点が。今井は同じ外科の助教授・太宰謙介（中原丈雄）と次期教授の座を争っていた。

そこに、屋上から落ちる前に今井が奥の部屋で「死んでいた」と証言する入院中の女の子（永井杏）が現れる。睡眠薬で眠らされていたのだろうと推理した右京は、ちぎれたベルト通しの話と併せ、今井の高所恐怖症を利用した巧妙な殺害方法に思い至る。

さらに復元された今井のパソコンのデータから、太宰がある患者に安楽死の措置を施したことが判明する。ただ命を長らえさせるだけの延命措置に疑問を抱いていた部下の医師・鴻野麻奈美（伊藤裕子）も、それに協力していた。

だが、太宰は犯人ではなかった。新たに捜査を進める右京と薫だったが、右京が婦長の大谷房子（銀粉蝶）に殴打され気を失い、今井と同じ部屋に運ばれ薬で眠らされる。大谷は、鴻野、医師・佐野昌平（東根作寿英）とともに今井を殺した犯人グループのひとりだった。事件の発覚を恐れた3人は、同じように右京の殺害を図る。

気づいた薫が病院内を探すが右京は見つからない。ところが、鴻野の部屋で薫が連絡を取ると、右京が持っているはずのポケベルが鳴る。「どこですか、右京さんは。俺の相棒はどこだ！」と厳しく鴻野を問い詰める薫。

部屋では、右京はすでに目覚めていた。あの女の子から「刑事さんが死んでる」と教えられた太宰が助けてくれたのだ。「小さな救世主」のお手柄だった。そして犯人の3人も無事取

り押さえられる。

患者の苦しみや痛みをまったくわからうとしない今井が教授になることを3人は恐れていた。安楽死も太宰なりの信念があつてのこと。今井による告発で太宰が失脚することを防がなければという思いに駆り立てられ、自殺に見せかけて殺したのだった。

そう抗弁する鴻野らに、肝心の太宰はどう言うだろうかと右京は問いかける。「あなたがたの尊敬する太宰先生も人を殺しました。けれどもそれは、命に真摯に向き合い、悩んだ末の決断でした。あなたがたの愚かしい行為は、そんな太宰先生を助けるのではなく、むしろ先生の医者としての誇りを傷つけることになりませんか？ 太宰先生が、そんなことを望んでいたと思いますか？ あなたがたは、すっかりそれを考えたんですかっ！」。

殺人事件は解決したが、太宰は安楽死措置の責任をとって辞職し、裁判の場で自分の信念を訴えることを決意する。海外では合法化されている国もあるが、日本において安楽死は犯罪だ。だが「僕は人殺しと簡単に決めつけない気がします」と語る右京。

社会派ドラマとしての『相棒』の出発点となった回である。安楽死の問題はきわめてデリケートなもののひとつだろう。賛否が大きく分かれる問題だが、いまふれた最後の右京のセリフにもあるように、ここでは議論を深めることの大切さが示唆されている。

また、右京がここまで命の危険にさらされる展開は珍しい。それゆえ「俺の相棒はどこだ！」と必死に叫ぶ薫の姿も引き立つ。その意味で、最初明らかによそよそしかった右京と

薫のバディとしての絆がぐつと深まった回にもなっている。

たまきも、右京が薫と組んでから軽口も叩くようになったと驚く。ふざける薫を右京がツッコんだり「はいはい」などとすかしたりするのはもはや日常茶飯事だが、薫との出会いが右京を変えたということであればいっそう感慨深い。薫のほうは右京の冷徹さにまだついていけないところがあるのだが、意外に右京は薫のことを気に入りはじめているのがわかる。ラストシーン、出勤してきた薫の目の下に隈ができていると右京がからかう。さらにはストレートな下ネタを口にし、薫の慌てぶりを見て楽しそうに笑う右京も珍しい。

いずれにせよ、第1話が警察ドラマ、第2話が連続殺人犯との対決、第3話が社会派。その後『相棒』の主軸となっていくテーマがこの段階ですでに出揃っていることに、作品としてのコンセプトのぶれなさが感じられる。

# 2

シーズン1第7話 「殺しのカクテル」 (2002年11月20日放送)

脚本・櫻井武晴 監督・大井利夫

## 倒叙形式の名作

犯人が最初からわかっている倒叙ミステリーの形式。『刑事コロンボ』や『古畑任三郎』でおなじみだが、『相棒』においては珍しい。

三好倫太郎(蟹江敬三)は、オリジナルカクテルで有名なバーのマスター。店は大手飲食店チェーンの傘下にある。そこにチェーンが経営不振の折、三好の店で人気のカクテルを缶入りにして市販する計画が持ち上がる。自分の手作りカクテルに強い愛着のある三好は、チェーンの社長・倉沢(和田周)と激しく対立。思わず刺し殺してしまう。

その市販計画の件を知った右京は、ひとりの客として三好のバーを訪れる。カクテル談義に花が咲く2人。だが右京が刑事であることを明かすと雰囲気は一変。ここからは右京と三好の静かに火花を散らすような駆け引き、腹の探り合いが始まる。

ポイントになるのは梅干とミント。検死結果から被害者の体内からその成分が発見されていた。一見すぐに結びつかないが、なにか意味はあるのか? 右京は梅干入りのカクテルを

次世代による次世代のための

# 武器としての教養 星海社新書

星海社新書は、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて、ここに創刊いたします。本の力を思いきり信じて、みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていききたい。若い力で、世界を変えていききたいのです。

本には、その力があります。読者であるあなたが、そこから何かを読み取り、それを自らの血肉にすることができれば、一冊の本の存在によって、あなたの人生は一瞬にして変わってしまうでしょう。思考が変われば行動が変わり、行動が変われば生き方が変わります。著者をはじめ、本作りに関わる多くの人の想いがそのまま形となった、文化的遺伝子としての本には、大げさではなく、それだけの力が宿っていると思うのです。

沈下していく地盤の上で、他のみんなと一緒に身動きが取れないまま、大きな穴へと落ちていくのか？ それとも、重力に逆らって立ち上がり、前を向いて最前線で戦っていくことを選ぶのか？

星海社新書の目的は、戦うことを選んだ次世代の仲間たちに「武器としての教養」をくばることです。知的好奇心を満たすだけでなく、自らの力で未来を切り開いていくための「武器」としても使える知のかたちを、シリーズとしてまとめていききたいと思います。

2011年9月

星海社新書初代編集長 柿内芳文



SEIKAISHA  
SHINSHO